

本の万華鏡

推薦者
布野 修司
(ふの・しゅうじ)

滋賀県立大学教授。一九四九年島根県生まれ。七二年東京大学工学部建築学科卒業。七四年同工学系大学院修士課程修了、七六年同工学系大学院博士課程退学。東京大学助手、東洋大学講師、助教授、京都大学助教授などを経て現職。著書は、『シニア都市建築中』(昭和堂)、『国家様式・テック・ロジック』(彰国社)、『住宅戦争』(彰国社)、『見知らぬ町の見知らぬ住まい』(彰国社)など。

『「51C」家族を容れるハウスの戦後と現在』

鈴木成文・上野千鶴子・山本理顕他著 平凡社 二〇〇四年

新しい居住スタイルに関する意識に関する一冊を、と言われて、すぐさま浮かんでくる本がない。本が書かれ、マニュアルが売れる事態が起きているとすれば、もはや「新しい」段階は終わっているのではないかなどと思う。シェアハウスとか、コレクティブハウスとか、カンガルハウスとか、団塊世代の田舎暮らしとか、カルト集団の共同生活とか、外国人の共同アパートとか、風車やソーラーバッテリーのついたエコハウスとか、オフィスをコソヴァージョンした住まいとか、思い浮かべてみると、興味があるのは新しい居住スタイルよりも、その容器の方である。すなわち、住居形式、居住空間の型の問題である。

住居という容器は、そもそも保守的なものだと思う。しばしば、新しい居住スタイルを生み出す阻害要因ともなる。この間、日本の居住スタイルを規定してきたのは、nLDKという居住形式である。あるいはnLDK家族ともいって、近代家族(核家族)のかたちである。新しい居住スタイルが広範に生まれてきているとすれば、nLDK家族モデルが崩れてきているということになるが、はたしてそうか。

こうした問題を、『51C(公営住宅一九五一年のC型)にまで遡って議論しているのが本書である。いささか理屈っぽいかもしれないが、新しい居住スタイルを考えるテキストとしては、上野千鶴子、山本理顕を軸とする議論が最良だと思う。山本の著書には、他に『住居論』『私たちが住みたい都市』などがある。

理想の住まいはと聞かれれば、「ホテルのような住まい」と答える。完全サービス付きの住宅である。しかし、一生遊んで暮らせる資産家でなければ、そんな居住スタイルは無理である。また、住まいの本質でもな、いと思う。介護の問題にしても何にしても、サービスされるものとサービスするものとの関係、集まって住むかたが新しい居住スタイルに関わっているのだと思ふ。



from editor's room

CEL編集部が推薦する参考図書

- 『日本の住宅 戦後50年 - 21世紀へ 変わるものと変わらないものを検証する』布野修司編 彰国社(1995年)
- 『新・集合住宅の時代』小林秀樹 NHK出版(1997年)
- 『町家型集合住宅 - 成熟社会の都心居住へ』巽和夫編 学芸出版社(1999年)
- 『二住生活のすすめ』松田力 同朋舎(2000年)
- 『変わる家族と変わる住まい - “自在家族”のための住まい論』篠原聡子 彰国社(2002年)
- 『少子高齢時代の都市住宅学 - 家族と住まいの新しい関係』広原盛明、岩崎信彦、高田光雄 ミネルヴァ書房(2002年)
- 『マルチハウジング論 住宅政策の転回』住田昌二 ミネルヴァ書房(2003年)
- 『コーポラティブハウス - 21世紀型の住まいづくり』高田昇 学芸出版社(2003年)
- 『ドクター・ケビン』里山ニッポン発見記『ケビン・ショート 家の光協会(2003年)
- 『コレクティブハウジングで暮らそう - 成熟社会のライフスタイルと住まいの選択』小谷部育子 丸善(2004年)
- 『コモンでつくる住まい・まち・人 - 住環境デザインとマネジメントの鍵』斎藤広子、中城康彦 彰国社(2004年)
- 『家族と住まいの家 - 血縁から“暮らし縁”へ』島村八重子、寺田和代 春秋社(2004年)
- 『住まいと家族をめぐる物語 - 男の家、女の家、性別のない部屋』西川祐子 集英社(2004年)
- 『データで読みとく都市居住の未来』都市住宅学会編 学芸出版社(2005年)
- 『地域居住とまちづくり』西村一朗 せせらぎ出版(2005年)
- 『都市のガバナンス』神野直彦編 岩波書店(2005年)
- 『町に住まう知恵 - 上方三都のライフスタイル』谷直樹 平凡社(2005年)
- 『リノベーションの現場 - 協働で広げるアイデアとプロジェクト戦略』五十嵐太郎+リノベーション・スタディーズ 彰国社(2005年)
- 『人と縁をはくむまち育て - まちづくりをアートする』延藤安弘編 萌文社(2005年)
- 『間取りの世界地図 - 暮らしの知恵ときたり』服部孝生 青春出版(2006年)
- 『徹底討論 私たちが住みたい都市 - 身体・プライバシー・住宅・国家 工学院大学連続シンポジウム全記録』山本理顕編 平凡社(2006年)